

高知県鏡川に遡上する天然アユのアユポックスウイルス感染状況の調査

○加藤佑亮（高知大農）・山下はづき・門野真弥（高知大院農）・
高橋徹・片岡榮彦・大崎靖夫（鏡川漁協）・今城雅之（高知大農）

【目的】鏡川本川中流部に鏡ダムがあり、同ダム下流の本川と支流との合流点において、2017年6月中旬に異型細胞性鰓病によるアユ大量死が初めて確認され、県内関係者の大きな注目を集めた。そこで本研究では、その原因究明に資する情報を得るため、遡上時期の本川下流の天然アユを対象にして、本疾病の原因となるアユポックスウイルス（PaPV）の検出をPCR法により行い、感染率の推移を調査した。

【方法】本川下流に2地点、すなわち下流側からSt.1とSt.2（両間距離約3.4km）を設けて、2018年3月から5月まで各月毎に1回ないし2回アユ15尾を採捕した。また、6月に昨年大量死が確認された地点で死亡アユを総計9尾回収した。採捕アユの由来を側線上方横列鱗数により判別後、鰓組織の一部を切り出し、ReliaPrep gDNA Tissue Miniprep SystemでDNA抽出し、各DNAサンプルをAmpdirect Plusを用いたPCR法に供した。

【結果】側線上方横列鱗数の計数結果、2地点で採捕したアユは4月27日と5月15日のSt.2の1尾を除き、天然アユと判別された。PCR法の結果、PaPV陽性率は、St.1で3月14日に66.7%、3月27日に86.7%、4月18日に13.3%、St.2で3月31日に33.3%、4月27日に6.7%、5月15日に13.4%となり、これらの陽性検体は全て天然アユであった。死亡個体9尾のうち1尾は尾柄部に潰瘍を呈し、同9尾中6尾がPaPV陽性となり、1尾以外放流アユであった。以上から、天然アユは遡上初期の3月に下流側ほどPaPVを高率に保有していたものの、その割合は4月以降急減することが分かり、よって、異型細胞性鰓病による天然アユ大量死のリスクは、アユの遡上とその時期の経過に伴って低下していくものと示唆された。